

ミュージアムロードを、地域文化を織り成す縦糸へ

■背景

ミュージアムロードは、観光を目的とした回遊性強化よりも、まず何よりここで暮らす人々に寄り添うべきだと考えた。兵庫県立美術館周辺や王子動物園周辺は特に住宅エリアであり、その中心を貫くこの道においては、外部から話題を呼ぶこと以上に、日々を穏やかに過ごし、土地への誇りを育みながら暮らせる環境こそ最優先されるべきである。

さらに、この地域は三宮や新神戸といった都心に近い一方で、海と山に挟まれた神戸特有の地形の中に位置しており、住宅が帯状に連続する“生活のまち”である。都心のにぎわいのすぐ隣にありながら、ミュージアムロードは日常の動線が交差するエリアであるため、この道を「暮らしの中心軸」として捉えた。県立美術館や王子動物園などへの来訪者を暖かく迎え入れながら、生活動線としての安心感や心地よさを整えることこそが、この地域の実態に即したアプローチだと言える。

またここで「暮らす人々」には住民だけでなく、周辺に点在する多くの学校に通い、日中の多くをこの地域で過ごす学生たちも含まれる。彼らにとっても、生活の舞台としてこの道が愛され、日常の安心感と活力を育む場になることが求められている。

■現状と課題 (3つの視点から分析)

交流

動物園には親子、登下校時には学生など場所や時間帯によって利用者が散見された。しかしながら、ミュージアムロード全体として、行き交う人は少なく、活気があまり感じられない。このことに加えて、歩道に設置されているアート作品を通した人々の交流がないことも課題だ。



■資源・強み

- 周辺の中学・高校の学生
- 関西学院大学新校舎設立に伴う学生
 - 留学生が多い
- ミュージアムロード沿いの特に灘駅～動物園までに活用できる（空いている）室内空間が多い

癒し

南北を走るミュージアムロードは、傾斜がきつく歩くだけで疲れてしまう。また、灘駅から北上する道には、花壇はあるものの整備が行き届いておらず、四季を感じずらく、閑散としている。ミュージアムロードを歩くこと自体の楽しさが弱く、単なる移動の動線でとどまっていることが問題である。



- 花壇(花は植えられていない)や植栽を整備できるスペースが豊富
- 動物園の動物
- 桜並木

愛着

南北に伸びるミュージアムロードは灘駅で物理的に分断され、ひと続きの風景としてのまとまりを感じ取りにくい。さらに、北側エリアでは、長く動物園の象徴だったパンダが不在だが、ミュージアムロードは、その象徴的存在に依拠してきた面もあり、今は精神的な統合を支える拠り所を失ったかのような空白を感じた。この道が再びここで暮らす人々の記憶に刻まれる価値を取り戻すための再構築が求められる。



- ミュージアムロード沿いのアート作品
- 多くの学生にとっての通学路である
- 豊富な文化教育施設

ミュージアムロード、それは **縦糸** である

地図上に南北に走るミュージアムロードは、まさに、この地域の“縦糸”として機能できると考える。アート、学生の生活拠点、住宅、文化施設——多様な営みが交差し重なり合う場の中心に、この道は常に存在している。織物における縦糸が布の骨格を形づくるように、ミュージアムロードは地域文化と生活の基盤を支える。縦糸が過去の編み目と今の編み目を一筋に貫くように、ミュージアムロードは世代をつなぐ。そして、人々の精神的な結びつきを生み出す象徴となることを目指す。この道を縦糸として再定義することによって、エリアは世代と文化を結ぶ確かな骨格を得て、持続的な豊かさを紡ぐ地域へと歩み出すと考える。

むすぶ

一人と人をむすぶ舞台に

周辺には多くの学校があり、開設予定の大学新キャンパスは学生の人種も多様。ミュージアムロードが若者の活気に助けられながら、住民を中心に、豊かな交流の舞台となることを目指す

ほぐす

一心をほぐす、生活空間に

アートの力に励まされながら、四季を感じ、何気ない日常が巡ることの尊さを感じられる、ぬくもりに満ちた生活の場となることを目指す

つむぐ

新たな物語をつむぐ場所に

住民だけでなく、ここに通う学生、この街の文化を愛して通う人びとにとって、愛おしい故郷となるように。震災の復興を経て、まちが彼らの新たな拠り所となるストーリーが息づくことを目指す



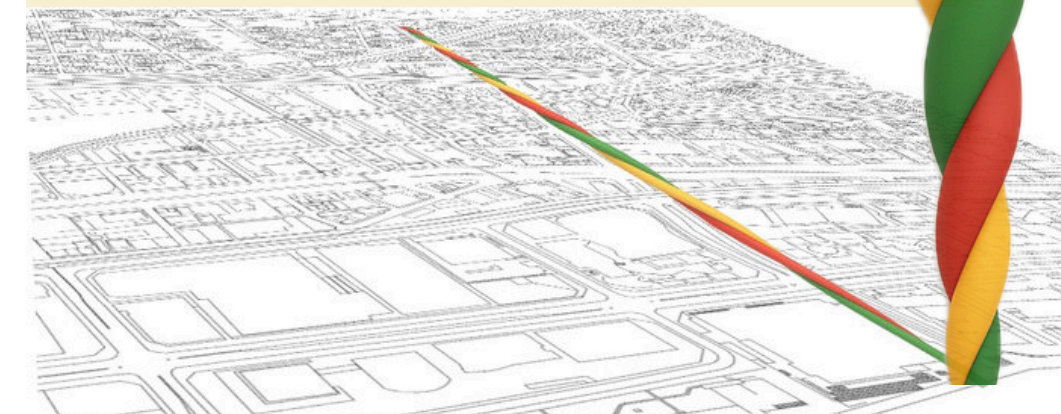
灘駅北側の活用できる室内空間



灘駅北側の彩がない花壇



ミュージアムロードを歩く登下校中の学生



「むすぶ・ほぐす・つむぐ」を実現するための施策

むすぶ

オープンスペースの活用

空いているスペースを新たな交流の場へと変化させる
ミュージアムロード利用者へ一般開放する施設として貸し出すことで交流を生み出す



利用例①学生の学習スペース

ミュージアムロードを通学路として使う学生の自習・作業スペースの役割を果たす。
学校を超えた交流を促す可能性も秘めている。

利用例②イベントスペース

近所の住民や学生のイベント開催の場となる。
時には吹奏楽部や軽音部の学生が、時には住民が組んだバンドなど、オープンな空間での演奏はミュージアムロード全体に音楽を響かせる。



ほぐす

癒しの提供

灘駅の北側の道には、歩行者が癒しを感じられる道や空間を提供する



①四季によって変わる植物

②机と椅子の設置

誰もが利用可能。ちょっとした休憩やおしゃべりの場に。

③オーニングの設置

雨でも安心して通れる道へ。

ミュージアムロードらしさを感じられるデザインに。

④施設へ誘導する足跡

動物園の動物の足跡を思わせる印が歩行者にワクワク感を与えながら道を案内する。



つむぐ

「ミュージアムロードといえば」の形成で愛着の湧く道へ

地域参加型のイベント開催など、ミュージアムロードを盛り上げる仕掛けを設け、この土地と人とのつながりを深める

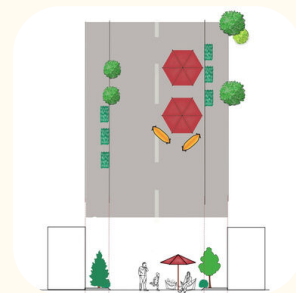


イルミネーション

ミュージアムロードの代名詞となるようなイルミネーションイベントを実施する。
大々的な規模で実施することで、住民だけでなく周囲からの認知の向上を目指す。
神戸ルミナリエを彷彿とさせるような大々的な季節のイベントにする。

アート作品コンテスト

住民を対象に、アート作品のコンテストを開催。
参加型のイベントの実施によって、アートは見るものから創るものになり、住民を巻き込むことで、活気あふれるミュージアムロードになる。表彰式は兵庫県立美術館と共同で行い、作品展示も行うことで、地域一帯のイベントになっていく。



高架下のプロジェクションマッピング

高架下を真っ白なキャンバスに見立ててアート作品を作り上げる。
季節やイベントに合わせたプロジェクションマッピングを夜間に映し出す。
住民の作品や近隣の学校と共同での作品を映すことで生活の一部として彩りを与える。
さらに、夜間は安全面の向上も期待できる。

マスコットキャラクター

現在の「ミカエル」をより地域に定着させることを目指す。
ミュージアムロードのキャラクターとして、ポスターなどにすることで住民への定着をめざす。
糸をイメージして編み物でミカエルを形作るなどすると、より今回のコンセプトとマッチするだろう。

キャッチコピーの作成

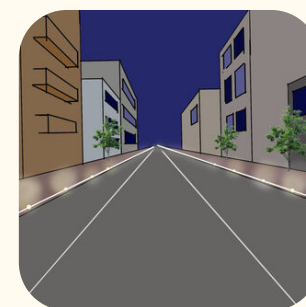
既存のアート作品に対してキャッチコピーをつけることによって、作品への親近感を高める。

パークレットの定期的な開催

道路の交通量を規制し、歩行者が自由に道路を使えるパークレットを開催する。
ミュージアムロードに存在する飲食店がテラス席を作り新規顧客の獲得を目指すことができたり、子供たちがチョークで道路にお絵かきをしてアートに触れることができるようなイベントを実施する。
ミュージアムロードに対する愛着を強めることができるだろう。

学園祭とのコラボ

王子公園に新設される関西学院大学の学祭に共同してもらい、学生たちが作品を展示できる場所とする。
学祭をより広範囲で行うことで地域全体のイベントという位置付けを目指す。
ミュージアムロードにも学生がパネル作品を展示したり、屋台を出したりすることで地域全体を盛り上げる。



路上ライト「糸」

歩道にミュージアムロードを貫く2本の糸をイメージしたライトを埋め込む。
今まで北と南で分断されていたミュージアムロードにより一体感を生み出す効果が期待できる。
住民も他の道との識別がしやすく、愛着の生成につながるだろう。
夜間の安全面の向上にも寄与する。



オープンスペースの活用

道路周りの環境整備

- ・四季にあった植物
- ・机と椅子の設置
- ・オーニングの設置
- ・施設へ誘導する足跡

プロジェクションマッピング

路上ライト「糸」

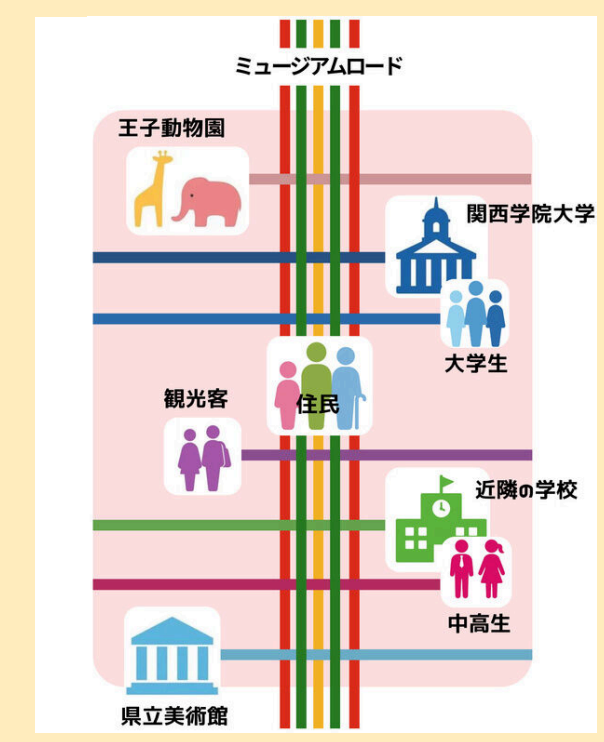
地域参加型のイベント開催

- ・イルミネーション
- ・パークレット
- ・学園祭とのコラボ

アート作品コンテスト

その他の施策

- 「ミカエル」の更なるマスコットキャラクター化
- ・キャッチコピーの作成



ミュージアムロードは、周辺に集積する美術館、動物園、学校、住宅地をつなぐ軸として機能している。この道には、それらに向かう来訪者、学生、住民が日常的に行き交い、多様な気配が重なり合う。異なる目的で歩く人々が、この一本の道を共有することで、エリアにはゆるやかな活気が広がっていく。

中央を縦に伸びる五本のラインは、ミュージアムロードを象徴している。各拠点で行われる文化・学び・生活が交差し、相互に影響しあうことで、ミュージアムロードは新たな文化の創造につながる結節点となることを表現している。

今後、このミュージアムロードではさらなる創発が期待される。大学の新たなキャンパス開校により、国内外の多様な学生が行き交う生活圏となり、デジタル技術を活用した学びがもたらす新しい文化活動や創造の芽もこのエリアに広がるだろう。動物園のリニューアルによって生まれる新しい体験や学びが、ミュージアムロードを通して周辺資源の文化的な魅力と調和しながら、新たな訪問動機を生み出していくことも期待できる。

「縦糸」文化形成の流れ

1 住みやすさの形成・ミュージアムロードの定着

道路整備

住みやすさを届けるため道路整備に着手。道路整備の一環として道路に「糸」ライトを埋め込むことにより夜間の安全性を高めると同時に今回のコンセプトである「糸」の定着化、ミュージアムロードの一貫性の向上を目指すことで開発の基盤を作る。

自然の再生

何も植えられていない花壇に花を植え、四季が感じられるようにする。整備されていない植物は、道路の過疎化や廃れを連想させてしまう。植物を整備することで道路の周囲まで明るくすることができる。

作品の日常化

現在のミュージアムロード展示作品にキャッチコピーをつけ、市民に親近感を持ってもらう。「ミカエル」を大々的にマスコット化することで道のブランド化を図り、より個性のある開発を可能にする。

2 人々の交流を促進

新施設との相乗効果を期待

2029年の関西学院大学のキャンパス新設と同時にオープンスペースの利用実現を目指す。学生の自己表現やコミュニティ形成の場として使用することで学生と街全体の交流を促進する。集大成として、学園祭とのコラボを目指す。ミュージアムロードにも学生のパネル作品などの展示物を飾ることで住民×学生の巨大イベントになるだろう。

住民同士での交流の促進

進めてきた道路整備が完成した後、パークレットの定期的な開催に取り組む。ミュージアムロードにあるお店を知る機会を増やすと同時に、住民同士の交流を促進する起爆剤的な役割を果たすだろう。

3 交流をもとに文化を形成

外部に対しての発信

よりミュージアムロード周辺を活発にするため来訪を促す新たな取り組みに挑戦する。イルミネーションなどアートに絡めた大々的なイベントを行うことで地域外に対してミュージアムロードを広げていく足がかりにする。このようにして、10・20年と時が経つにつれてより盛り上がる新たな文化を創出していく。